

① 名古屋市におけるは虫類の概況

これまでに名古屋市内で繁殖、定着が確認されている在来の爬虫類は2目8科14種である。外来であることが明らかな爬虫類としてカメ目の18種類（種、亜種、品種）が捕獲されており、そのうちミシシippアカミミガメが市内で繁殖している。以上を日本爬虫両棲類学会の日本産爬虫両生類標準和名リスト（2020年3月16日版）に準拠して列挙すると下のとおりである。（ただし下の爬虫類の分類学的体系は必ずしも系統関係を反映しているわけではない。）

爬虫綱 Reptilia Laurenti, 1768

カメ目 Testudines Linnaeus, 1758

イシガメ科 Geoemydidae Theobald, 1868

イシガメ属 *Mauremys* Gray, 1869

クサガメ *Mauremys reevesii* (Gray, 1831)

ニホンイシガメ *Mauremys japonica* (Temminck et Schlegel, 1838)

ヌマガメ科 Emydidae Rafinesque, 1815

アカミミガメ属 *Trachemys* Agassiz, 1857

アカミミガメ *Trachemys scripta* (Schoepff, 1792)

ミシシippアカミミガメ *Trachemys scripta elegans* (Wied, 1839)

スッポン科 Trionychidae Bell, 1828

スッポン属 *Pelodiscus* Fitzinger, 1835

ニホンスッポン *Pelodiscus sinensis* (Wiegmann, 1835)

有鱗目 Squamata Opperl, 1811

トカゲ亜目 Lacertilia Owen, 1842

ヤモリ科 Gekkonidae Gray, 1825

ヤモリ属 *Gekko* Laurenti, 1768

ニホンヤモリ *Gekko japonicus* (Duméril et Bibron, 1836)

トカゲ科 Scincidae Gray, 1825

トカゲ属 *Plestiodon* Duméril et Bibron, 1839

ヒガシニホントカゲ *Plestiodon finitimus* Okamoto et Hikida, 2012

カナヘビ科 Lacertidae Opperl, 1811

カナヘビ属 *Takydromus* Daudin, 1802

ニホンカナヘビ *Takydromus tachydromoides* (Schlegel, 1838)

へび亜目 Serpentes Linnaeus, 1758

タカチホへび科 Xenodermidae Gray, 1849

タカチホへび属 *Achalinus* Peters, 1869

タカチホへび *Achalinus spinalis* Peters, 1869

ナミへび科 Colubridae Opperl, 1811

ジムグリ属 *Euprepiophis* Fitzinger, 1843

ジムグリ *Euprepiophis conspicillatus* (Boie, 1826)

ナメラ属 *Elaphe* Fitzinger, 1833

アオダイショウ *Elaphe climacophora* (Boie, 1826)

シマヘビ *Elaphe quadrivirgata* (Boie, 1826)
ヒバカリ属 *Hebius* Thompson, 1913
ヒバカリ *Hebius vibakari* (Boie, 1826)
ヒバカリ *Hebius vibakari vibakari* (Boie, 1826)
マダラヘビ属 *Dinodon* Duméril, Bibron et Duméril, 1854
シロマダラ *Dinodon orientale* (Hilgendorf, 1880)
ヤマカガシ属 *Rhabdophis* Fitzinger, 1843
ヤマカガシ *Rhabdophis tigrinus* (Boie, 1826)
クサリヘビ科 *Viperidae* Laurenti, 1768
マムシ亜科 *Crotalinae* Opper, 1811
マムシ属 *Gloydius* Hoge et Romano-Hoge, 1981
ニホンマムシ *Gloydius blomhoffii* (Boie, 1826)

カメ類では、ニホンイシガメのみが本州、四国、九州に分布する日本列島の固有種で、クサガメとニホンスッポンは北海道には分布していないものの、東アジアに広く分布している。ただし後者の2種については、現在系統、分類を見直す研究が進められている。ヘビ類は8種すべてが日本列島の固有種であり、近縁種が大陸に分布している。トカゲ類ではニホンカナヘビのみが北海道、本州、四国、九州に分布する日本列島の固有種で、ヒガシニホントカゲは東日本から北海道、極東ロシアに、ニホンヤモリは本州、四国、九州から朝鮮半島、中国東部に分布している。

名古屋市内に定着しているカメはクサガメ、ニホンイシガメ、ニホンスッポン、ミシシippアカミミガメの4種である。市内のミシシippアカミミガメは、ペットとして流通され飼育されていたものの一部が野外に放逐されたものか、親となったそれらの個体の子孫である。環境への順応性が高く、原産地ほど天敵もないミシシippアカミミガメは市内の池沼や河川で急増している。しかし在来のカメの方は、次の項で種ごとに詳しく述べるように、個体数が減少傾向にある。

名古屋市内におけるカメの減少のおもな原因は、次の3点にまとめられよう。

1点目は、ハビタット (*habitat*、生息場所) の状態の悪化である。市内では次のような開発行為、つまり

- (1) 水田や池沼などの湿地が、宅地化などで埋め立てられる
- (2) ため池や川の水辺エコトーンがコンクリートやブロックで護岸される
- (3) 道路や河川の堰堤、ため池の余水吐のような、カメの移動を阻害する構造物が敷設されるといった、水辺環境の人為的な改変が進んでいる。その結果、
 - (イ) 生活空間の消失
 - (ロ) 越冬場所と夏の活動場所との間の季節的移動の経路の遮断
 - (ハ) 遺伝的集団の細分化や分断化あるいは孤立化
- (ニ) 餌資源の減少
- (ホ) 個体の病気や怪我あるいは死亡の多発

といった、カメの生活への障害が生じている。

2点目は、カメを捕食したり傷つけたりする外来生物の出現である。近年市内では、四肢や尾が切断される大けがを負ったり、頭部が切断されて死亡したりしたカメ、特にニホンイシガメが見つかるようになった。これは北アメリカから持ち込まれたアライグマの仕業である可能

性が高く、実際にはかなり食害されている怖れがある。また大型のアメリカザリガニ、大陸型のコイ、カムルチー、ブラックバス、アリゲーターガー、ウシガエル、ミシシippiaカミミガメ、ホクベイカミツキガメ、ワニガメ、シベリアイタチといった市内で見つかる外来動物は、幼体、あるいは場合によっては成体の在来ガメを捕食している可能性がある。

3 点目は外来のカメによる在来のカメへの圧迫である。外来ガメによる捕食についてはすでに上述したが、その他に種間競争を通しての種の置換、および遺伝子汚染（遺伝子移入、遺伝子浸透）の被害が市内で生じている。小型～中型の水棲カメ類のいくつか、特にミシシippiaカミミガメは、ニホンイシガメなど在来のカメと食物、あるいは日光浴や産卵、越冬、採餌の場所が共通しており、生態的地位（ニッチ）が似ている。そうすると競争排除の効果が働き、在来のカメが本来のハビタットから追い出されてしまい、ミシシippiaカミミガメが優占するようになる。また同じ科であるカメが野外放逐されると、種間で交雑し、カメの場合繁殖能力を持つ子孫を生み出すことがある。市内ではニホンイシガメとクサガメとの交雑個体が市内各地で確認されている。ニホンイシガメとクサガメは棲み分けるのがふつうである。にもかかわらず交雑が起こっているのは、ペットとして流通したクサガメの野外放逐によって、両種が同所的に生息する機会と場所が増えたからである。また市内では全国で初めて、台湾に分布するハナガメとニホンイシガメ、およびハナガメとクサガメの交雑個体が野外で確認されている。ハナガメおよびこの種と他種との間の交雑個体は、名古屋市での発見、採集、研究が契機となり、2016年10月に特定外来生物に指定された。

市内で確認記録が残されているヘビ類はタカチホヘビ、ジムグリ、アオダイショウ、シマヘビ、ヒバカリ、シロマダラ、ヤマカガシ、ニホンマムシの8種である。ツシママムシやアカマダラ、ダンジョヒバカリといった島嶼部に局地的に分布する種を除き、名古屋市には日本列島に広く分布する8種類のヘビが全て分布していることになる。ただし市内では、程度の差はあれ、どの種も個体数が減少傾向にある。

個体数減少の原因の第1は、食物であるカエルの減少である。1980年代以降、世界的に両生類が減少していることが知られており、名古屋市でも同様の傾向がある。毒性の強いヒキガエルを含めてカエルを専門に捕食するヤマカガシ、魚食性でカエルの幼生、つまりオタマジャクシもよく食べるヒバカリ、多様な動物を捕食するが、カエルへの依存度が高いシマヘビとニホンマムシについては、カエルの減少が個体数の現象の一因になっていることは間違いない。一方、小型の哺乳類や鳥類といった恒温動物を食べるアオダイショウや小型哺乳類を専門的に捕食するジムグリ、爬虫類食であるシロマダラ、土壌動物を食べるタカチホヘビには、この危惧は当てはまらない。

第2はハビタットの環境の悪化である。市内で活発に行なわれている土地の造成や区画整理によって、ヘビたちのねぐらである地面の穴や割れ目、すき間が無くなってきている。多くのヘビにとって好適な活動場所である草むらは減少している。また市の東部の里山が間伐などの手入れをされていないために、繁茂した枝の葉が太陽光を遮り、林床の温度が低下したり日当たりが無くなって日光浴ができなくなったりして、ヘビが棲みづらくなっている。

トカゲ類ではニホンヤモリ、ヒガシニホントカゲ、ニホンカナヘビの3種が分布している。カメやヘビに比べれば体がかなり小さいこれらのトカゲの内、ヒガシニホントカゲとニホンカナヘビは、草むらや灌木といった植生のある場所のほか、ちょっとした公園や住宅の庭などでもよく見られ、急激な減少や絶滅の危惧は感じられない。住家性のニホンヤモリも、最近の住宅が木造ではなくなり、多少住みづらくなったとはいえ、減少の心配は当面しなくて良いと思われる。ただし都市化の進行で緑地が減少することによる生息地の分断や個体群の細分化については、大都市である名古屋市においては警戒が必要である。

分子系統解析により、日本列島に分布するニホンヤモリは中国東部から人為的に移入されたとする説が提出されており、今後の研究の進展を待ちたい。

ロシアの沿海州から北海道、本州東部に分布するヒガシニホントカゲは、従来ニホントカゲとされていたのであるが、本州西部、四国、九州に分布するニホントカゲとは系統的に異なることが最近の研究で明らかになり、新種として2012年にヒガシニホントカゲと命名された。

2004年のレッドリスト、そして2010年のレッドリスト補遺版において「情報の少ない爬虫類については、調査期間や調査者の数の規模がある程度保証された、組織的な現況調査が必要である」と指摘されていた。カメについてははなごや生物多様性保全活動協議会を始めとする団体、個人による野外調査が積極的に進められ、分布や生息の状況は、全国の他の市町村と比べてもかなりよく分かっているとよい。しかし、2015年版のレッドリストでも指摘されているが、ヘビ類については現在でも十分に情報収集や調査ができたとは言えず、引き続き次のレッドリスト改訂の際の課題である。

② 名古屋市における絶滅危惧種の概況

収集した情報を分析し、名古屋市に生息する爬虫類の絶滅危惧の程度を次のようにランク付けした。

絶滅危惧 IB 類 (EN) : ジムグリ、シロマダラ

絶滅危惧 II 類 (VU) : ニホンイシガメ、ヒバカリ、ヤマカガシ、ニホンマムシ

準絶滅危惧 (NT) : シマヘビ

情報不足 (DD) : クサガメ、ニホンスッポン、タカチホヘビ

ジムグリは、2004年および2010年の名古屋市版レッドリストではNTに指定されていたが、論拠であった報告(愛知県, 1996)を精査したところ、名古屋市に分布しているという記述はなかったため、2015年版レッドリストから外した。しかし2015年から2019年までの間に守山区、名東区、千種区において生息が確認された。確認数は少なく、市内での分布は局所的で、この種に適した生息地が急速に減少していることから、今回ENと評価した。

シロマダラは、2004年に名古屋市内で最初に確認されて以来、確認事例はわずかであるものの2008年に1例、2014年に2例見つかってきた。ところが2015年以降は確認されておらず、急激に減少している可能性が高い。またヒガシニホントカゲやニホンカナヘビは市内では多く生息しており、爬虫類食のこのヘビが食物不足に陥っているとは思えないが、里山や森林の環境の悪化が続いていて、活動領域やねぐらが失われていることから、2010年と2015年のVUから、2020年にはENに危機レベルを上げた。

ニホンイシガメについては、池沼、河川の生息環境は悪化の一途であり、アライグマのような捕食性の外来動物やアカミミガメのような外来のカメの生息への影響は増す一方であり、おそらくニホンイシガメの生息地に人為的に持ち込まれたと推定されるクサガメによる遺伝子汚染の危険性は減っていない。分布域はそれほど減っているわけではないが、個体群密度は下がっていると推定され、繁殖も順調であるとは考えにくい。今回は2015年のランクVUを踏襲した。

ヒバカリについては、名古屋市でカエルの個体数が減っているために、この種の餌となるカエルの幼生も減り続けている。また、河川や池沼の水辺(岸)のハビタットがコンクリートやブロックで固められたり、水辺の植生が失われたりして、生活空間も減り続けている。日本列島では普通種であるはずのこの種の確認事例も、市内では大変少ない。今回は2015年のランクVUを踏襲した。

ヤマカガシは従来、田園や草地で最もふつうに見られるヘビのはずであるが、近年名古屋市

内では異常なほど見られなくなった。この種にとって最も大きな影響は、専門に補食している両生類の激減であると考えられる。ヒキガエルは非常に有毒で、他のヘビはこのカエルをふつう補食しないが、ヤマカガシだけはむしろ積極的に補食する。両生類のところでも述べられているように、市内ではアズマヒキガエルが激減している。このこともヤマカガシの激減に拍車をかけていると思われる。他のヘビと同様に、急減の原因の一つはハビタットの環境の悪化であろう。今回は2010年、2015年に続き、VUとした。

ニホンマムシは、2012年に守山区で初めて確認されたが、その後は名東区と守山区の別の場所で見ついているにすぎず、市内での個体数は少なく、分布は局所的であると考えられる。名古屋市ではこのヘビの生息環境も悪化を続けている。このような状況を鑑み、2015年のDDから今回はVUにランクを変更した。

シマヘビは日本列島においてはヤマカガシと同様に最もふつうに見られるはずのヘビであるが、近年名古屋市内ではほとんど見られない。原因は、食物として大きく依存しているカエルが減ったことと、ハビタットの環境の悪化であろう。ただしこのヘビは哺乳類、鳥類、爬虫類から節足動物まで多様なものを捕食するので、カエルが減ってもヤマカガシよりもその影響は少ないと期待できる。2004年、2010年、2015年のランクを踏襲し、NTとした。

クサガメは、2004年と2010年の段階では単に確認される個体数をもとにしてNTにランク付けされていた。しかしその後、名古屋市内で確認されたクサガメの一部は、分布や生息状況が不自然であることが分かってきた。クサガメにおいては、西日本や中国などの他地域で養殖された幼体がペットとして流通し、購入され飼育された個体が人為的に放される場合がある。それぞれのクサガメの個体あるいは個体群が名古屋市在来なのか、人為的に持ち込まれた外来動物なのか、今後の研究で確かめなければならない。クサガメについては2015年のランクDDを踏襲した。なお、近年遺伝子の多型の研究や江戸時代の文献の研究から、日本列島のクサガメは江戸時代に朝鮮半島か中国から移入された外来生物であるとの考え方が提出されている。しかし、クサガメが外来生物であると結論するには、それらの研究におけるデータやその解釈の仕方はまだまだ不十分である。中世後期(Takahashi et al., 2019)や弥生時代の遺跡からクサガメの遺体が出土した例があるので、少なくとも移入が江戸時代であったということは否定される。現段階では、クサガメが日本列島にとっての外来生物であるかどうかの可能性は否定できないが、結論には至っていないと考えるのが、科学的に適正な態度であろう。今後研究が深められていくことを期待したい。

ニホンスッポンについては、2004年にDDであったものを、捕獲調査において他種のカメよりも捕獲地点も捕獲数も少ないことから2010年にはVUにランクを変更した。しかし2015年にランクをDDに戻し、今回もそれを踏襲した。このカメは、かつては食用として養殖するためにしばしば人為的に移動された。2013年には千種区のため池で、飼育個体の放逐である可能性が高いアルビノの個体が見ついている。このことが示唆するように、現在ではしばしばペットとして販売されているニホンスッポンが市内で野外に放逐される場合があることはほぼ間違いない。ところが、調査のために捕獲した個体がもともと市内に生息していたのか、人為的に移入されたのかは、外部形態だけでは分からないことがほとんどである。今後の詳細なこの種の生物地理的、系統分類学的、生態学的研究が期待される。

タカチホヘビは、2008年に名古屋市内で確認されていたことが、2017年に論文として報告された。しかしまだこのヘビの市内における生息状況は分かっていないので、DDと評価した。

種の説明において、市内の分布については、「2009年度なごやため池生きもの生き生き事業報告書」「愛知県史 別編 自然」「愛知県の両生類・は虫類」「新修名古屋市史 資料編 自然 目録」「名古屋・東山新池ため池調査報告書2007」「なごやの生物多様性」誌から情報を

得た。またなごや生物多様性センターに寄せられた情報のうち、写真で同定が可能であったり、専門家によって確認されたりした資料を使った。カメについては「ミシシippアカミミガメ防除マニュアル—名古屋市内の活動を事例として—」も参照した。

③ 参考文献

以上の説明については、以下の文献を参照した。また、今回リストに挙げた爬虫類の種のそれぞれの解説においては、以下の文献のすべてあるいは一部を参考にした。繰り返しになるので、種の解説の部分では引用文献、参考文献の欄を設けず、ここにまとめて挙げておく。まず和文文献を著者名のあいうえお順に、次に英文文献をアルファベット順に並べる。

- 愛知県両生類・は虫類研究会, 1996. 愛知県の両生類・は虫類, 117pp. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋.
- 内山りゅう・前田憲男・沼田研児・関慎太郎, 2002. 決定版日本の両生爬虫類, 336pp. 平凡社, 東京.
- 千石正一・疋田努・松井正文・仲谷一宏(編), 1996. 日本動物大百科第5巻, 189pp. 平凡社, 東京.
- 中村健二・上野俊一, 1953. 原色日本両生類爬虫類図, 214pp. 保育社, 東京.
- 西尾和久・川瀬基弘, 2017. 東海地方におけるタカチホヘビ *Achalinus spinalis* の確認記録と生息環境, なごやの生物多様性 4: 31-41.
- 日本カメ自然誌研究会(監), 2014. ミシシippアカミミガメ防除マニュアル—名古屋市内の活動を事例として—, 34pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
- 野呂達哉, 2007. 爬虫類. 名古屋・東山新池ため池調査報告書 2007, pp.30-33. 名古屋ため池調査実行委員会, 名古屋市.
- 野呂達哉・矢部隆, 2009. 爬虫類. 2009年度なごやため池生きもの生き生き事業報告書, pp.1**-1**. 名古屋ため池生物多様性保全協議会事務局, 名古屋市.
- 野呂達哉, 2016. 名古屋市南区におけるシロマダラ *Dinodon orientale* の確認記録. なごやの生物多様性 3: 69-71
- 疋田 努・鈴木 大, 2010. 江戸本草書から推定される日本産クサガメの移入. 爬虫両棲類学会報第2010巻第1号, pp.41-46.
- 矢部 隆, 2008. 名古屋の生物 動物 爬虫類. 新修名古屋市史 資料編 自然, pp.271-279. 名古屋市, 名古屋.
- 矢部 隆, 2008. 爬虫類. 新修名古屋市史 資料編 自然 目録, pp.271-279. 名古屋市, 名古屋.
- 矢部 隆, 2010. 淡水棲・陸棲カメ類. 野生動物保護の事典, pp.569-577. 朝倉書店, 東京.
- 矢部 隆, 2010. 愛知の自然のなりたち 愛知の生物 愛知の脊椎動物. 愛知県史 別編 自然, pp.162-207. 愛知県, 名古屋.
- 矢部 隆, 2010. 愛知の自然と人々 残したい貴重な動植物 愛知の脊椎動物. 愛知県史 別編 自然, pp.597-618. 愛知県, 名古屋.
- Oh, H., S. Park, and S. Han, 2017. Mitochondrial haplotype distribution and phylogenetic relationship of an endangered species Reeve's turtle (*Mauremys reevesii*) in East Asia. *Journal of Asia-Pacific*

Biodiversity, 10 (2017): 27-31.

- Okada, Y., T. Yabe and S. Oda, 2011. Interpopulation variation in sex ratio of the Japanese pond turtle *Mauremys japonica* (Reptilia: Geoemydidae). *Current Herpetology*, 30(1): 53-61.
- Suzuki, D., H. Ota, H. Oh and T. Hikida, 2011. Origin of Japanese Populations of Reeves' Pond Turtle, *Mauremys reevesii* (Reptilia: Geoemydidae), as Inferred by a Molecular Approach. *Chelonian Conservation and Biology*, 10(2): 237-249.
- Suzuki, D., T. Yabe, and T. Hikida, 2013. Hybridization between *Mauremys japonica* and *Mauremys reevesii* Inferred by Nuclear and Mitochondrial DNA Analyses. *Journal of Herpetology*, 48(4): 445-454.
- Takahashi, A., A. Kusaka, and N. Kamezaki, 2019. Skeletal Remains of *Mauremys reevesii* (Testudines: Geoemydidae) from a Late Medieval Archeological Site in Fukuyama City, Hiroshima Prefecture, Western Japan. *Current Herpetology*, 38(2): 160-168.

④ レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各は虫類について、種ごとに形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

【掲載種の解説（は虫類）に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目・科の範囲、名称、配列は、原則として「日本産爬虫両生類標準和名」（日本爬虫両棲類学会，2020）に準拠した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は、原則として「日本産爬虫両生類標準和名」（日本爬虫両棲類学会，2020）に準拠した。

【評価区分】

対象種の名古屋市における評価区分を各頁右の上枠内に記述した。参考として「レッドリストあいち2020」「レッドデータブックあいち2020」（愛知県，2020）の愛知県での評価区分、及び「環境省レッドリスト2020」（環境省，2020）の全国での評価区分も併記した。

【選定理由】

対象種を名古屋市版レッドデータブック掲載種として選定した理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述し写真を掲載した。

【分布の概要】

対象種の分布状況を記述した。また、本調査において対象種の生息が現地調査及び文献調査によって確認された地域について、各区ごとに着色して市内分布図として掲載した。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息環境及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

ジムグリ *Euprepiophis conspicillatus* (Boie, 1826)

【評価理由】

名古屋市内で採集、確認され始めたのは2015年以降であり、この数年で3箇所で見つかっていないので、個体数は極めて少ないと考えられる。また里山や山地の開発、あるいは手入れの放棄によって、ジムグリの生息地は狭められており、現在個体数が減少している可能性が高い。したがって絶滅危惧IB類(EN)と評価した。

【形態】

全長70~100cm。背面は淡黄褐色あるいは緑がかった淡褐色で、小さい黒点が散在しており、腹面には黒い角張った市松模様が見られる。山地で土中に潜って生活するので、口に土が入らないように上顎が下顎に覆いかぶさっている。幼体の背面は鮮やかな朱色で、黒斑が横帯を成すように並び、頭部にはV字型の黒い帯模様が入る。

【分布の概要】

【市内の分布】

これまで守山区、名東区、千種区で確認されており、里山や雑木林が広がっている市の東部に分布は限られているようである。

【県内の分布】

名古屋東部丘陵、知多半島、渥美半島、三河地域の台地や山地の里山林や森林に比較的多く生息している。

【国内の分布/世界の分布】

北海道、本州、四国、九州のみに分布する日本列島の固有種である。

【生息地の環境/生態的特性】

主に山地に生息し、耕作地や草地にも見られるが特に森林に多い。和名は「地潜り」が由来とされ、その名の通りよく地中に潜る。自力で掘削もできるが、獲物となる動物の巣穴を追跡して潜り、小型哺乳類(ネズミ類、モグラ類)を捕食する。5~6月に交尾を行い、6~8月に2~8個の卵を産む。無毒。

【現在の生息状況/減少の要因】

名古屋市内にはジムグリの生息に適した場所が少ないので、生息数も少ないのであろう。ただしまだ名古屋市ではジムグリの生態の調査研究が十分ではなく、生息の実態が把握できていない。

【保全上の留意点】

名古屋市内では、丘陵地や山地におけるジムグリの生息地を確保すること、つまり生物相が豊かな林床を持った里山林や森林を残すことが重要であろう。

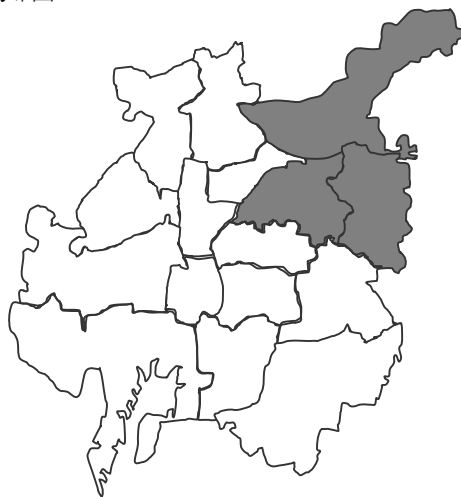
評価区分

名古屋市2020	絶滅危惧IB類
愛知県2020	リスト外
環境省2020	リスト外



ジムグリ(幼体)
豊田市旧藤岡町、2012年6月18日、矢部 隆 撮影

市内分布図



(矢部 隆)

シロマダラ *Dinodon orientale* (Hilgendorf, 1880)

評価区分

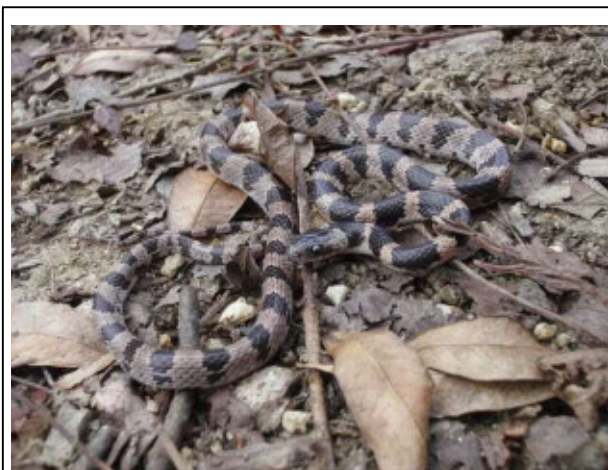
名古屋市2020	絶滅危惧 I B 類
愛知県2020	情報不足
環境省2020	リスト外

【選定理由】

名古屋市内において、シロマダラの主たる生息場所である林や森の林床の環境が、急速に悪化し、それともなって個体数が激減している可能性が高い。この種は2004年から2014年までの間に4例確認されたが、2015年以降現在まで見つかっておらず、減少の早さが増している恐れがある。そのため2015年の絶滅危惧種 II 類 (VU) からより厳しい評価である絶滅危惧 IB 類 (EN) に変更した。

【形態】

全長 30~70cm ほどの小型のヘビである。背面の地色は淡灰褐色で、胴に 40 個前後、尾に 15~20 個くらいの黒褐色の横帯がある。幼蛇には、頸部に左右 1 対の白い斑紋がある。瞳孔は縦に細長い楕円形であるが、虹彩が黒っぽいので、注意しないと瞳孔の形は分かりにくい。アオダイショウの幼蛇は背面の地色が淡褐色で、褐色のはしご状の横斑が並び、模様が似ているのでシロマダラと誤認されることがあるが、アオダイショウの瞳孔は円いので、区別することができる。



シロマダラ
豊田市足助町、2012年1月13日、矢部 隆 撮影

【分布の概要】

【市内の分布】

名東区 (2004 年)、千種区 (2008 年)、南区の近接する 2ヶ所 (2例とも 2014 年) で見ついている。

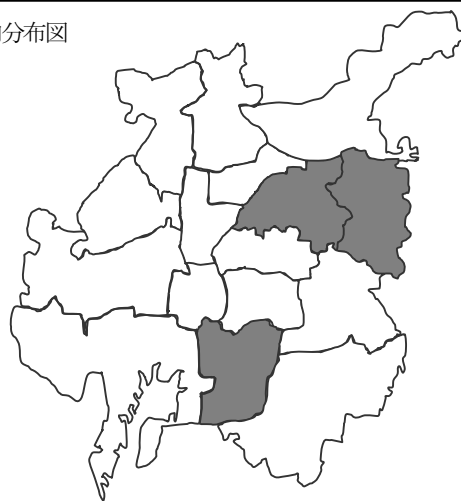
【県内の分布】

丘陵地や台地、山地の森や林に分布している。西三河や尾張よりも東三河において、よりしばしば目撃情報を耳にする。

【国内の分布/世界の分布】

本州、四国、九州に自然分布する日本固有種。

市内分布図



【生息地の環境/生態的特性】

丘陵地から山地にかけての森や林、河畔林に生息する。ガレ場など地面の乾いたところで見かけることがよくある。爬虫類食で、小型のヘビ類やトカゲ類を捕食する。夜行性である。繁殖生態はよく分かっていない。

【現在の生息状況/減少の要因】

2004 年以降名古屋市内で 4 頭見ついているが、生息状況はよく分かっていない。市内ではトカゲ類は少ないとは言えないが、ヘビ類が急減しているため、食物不足により、シロマダラの個体数が減っている可能性がある。また、林のような棲み家が減少し続けていることも、このヘビに悪影響を与えているに違いない。

【保全上の留意点】

夜行性で、小型なので、観察しにくいヘビである。今後注意深く種の分布様式や生息状況を明らかにし、市内でこの種がおかれている実態を十分に把握しなければならない。

(執筆者 矢部 隆)

ニホンイシガメ *Mauremys japonica* (Temminck et Schlegel, 1835)

評価区分

名古屋市2020	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2020	準絶滅危惧
環境省2020	準絶滅危惧

【選定理由】

市内の池や川で分布、生息調査が行われており、比較的多くの生息地が確認されている。しかし生息場所の環境の悪化、および外来動物による捕食や生活への圧迫、近縁種の導入による遺伝子汚染により、危機的な個体群が増えており、個体数はかなり減っている。

【形態】

背甲長はオス約12cm、メス約20cm。背甲後部の縁が鋸歯状であるが、老齢個体では摩耗することが多い。背甲は黄色ないし黄土色で、黒色か黒褐色の点模様が雲状に広がる。各椎甲板の前方中央部に、黒色の斑紋を持つ個体が多い。腹甲は一面黒色だが、肛甲板の後端が橙色を呈する個体もある。前膊部と脛部の後縁および尾の背面の左右に、橙色の縦条がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

2005年以降の調査では、熱田、昭和、千種、天白、中、中村、瑞穂、緑、南、名東、守山の各区で確認されている。

【県内の分布】

尾張東部丘陵から三河地方、渥美半島、知多半島に多く分布している。濃尾平野の低地部には、保護すべき小さな孤立個体群がいくつかある。

【国内の分布／世界の分布】

本州、四国、九州に自然分布する、日本の固有種である。

【生息地の環境／生態的特性】

同属のクサガメが、低地の止水あるいは緩やかな流れの水系に主に生息するのに対して、ニホンイシガメは丘陵地から山地にかけての地域、河川で言えば上流部を中心に棲む。秋と春に求愛、交尾する。産卵期は6～7月ごろで、年2回産卵する個体が多い。1回に6～7個前後産卵する。川の水底の落ち葉などの堆積物や岩の下、川の岸辺の浸食穴、池沼の水底で越冬する。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市では、生息地である水辺エコトーンが劣悪になり、日光浴、産卵、採餌、越冬、季節的移動に障害が生じている。また市内ではアライグマやウシガエル、アリゲーターガーやカムルチーやコイなどの外来動物が、幼体や、場合によっては成体を捕食したり負傷させたりしている。生態的地位が下がっている外来のミシシippアカミミガメの増加による生活の圧迫も深刻である。

【保全上の留意点】

性染色体を持たず、孵卵温度が高いとメス、低いとオスになる。したがって産卵場所の温度環境が好ましくないと、孵化個体の性比が偏り、長期的に見て個体群が維持できなくなる。貯精、遅延受精の能力があり、クサガメなど人為的に導入された近縁な他種のカメと交尾する機会が極めてわずかであっても、繁殖能力のある子孫を多数産み続け、遺伝子汚染が進行する恐れがある。本種の自然分布地で、人為的に移入されたクサガメとの交雑が確認された地域からは、クサガメを防除せざるを得ないであろう。

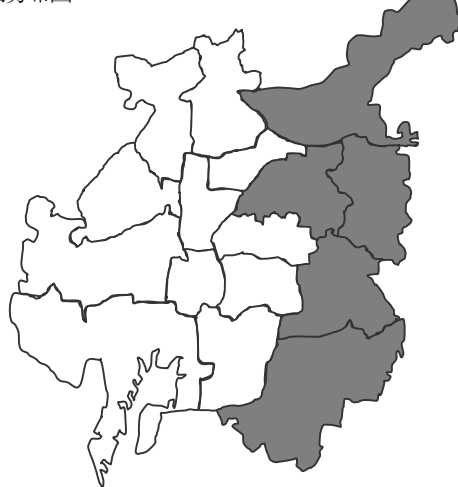
(執筆者 矢部 隆)



ニホンイシガメ

矢部 隆 撮影

市内分布図



ヒバカリ *Amphiesma vibakari vibakari* (Boie, 1826)

評価区分

名古屋市2020	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2020	リスト外
環境省2020	リスト外

【選定理由】

水辺を好むヘビであるが、水辺の環境の悪化により著しく個体数を減らしている。餌である小魚やカエルの幼生が減少しており、成育や繁殖が抑えられている。また、水辺の自然の植生が失われ、生活場所が奪われて、個体数が減少している。

【形態】

小型で、全長40～60cmである。体の背面は褐色または暗灰褐色。口角から後背方向に淡黄色の帯状の斑紋が走るが、この斑紋は頸部の背面で連結することはない。幼蛇も成蛇も模様は変わらない。

【分布の概要】

【市内の分布】

名東区(2009年)、守山区の2ヶ所(2009年、2012年)および千種区で確認されている。

【県内の分布】

深い山地を除き、県内に広く分布している。

【国内の分布／世界の分布】

本州、四国、九州に自然分布する日本の固有亜種である。なお、同種別亜種のダンジョヒバカリ *A. vibakari danjoense* が長崎県男女群島の男島に固有亜種として分布しており、朝鮮半島、中国北部、ロシア沿海州にはタイリクヒバカリ *A. vibakari ruthveni* が分布している。



ヒバカリ
岐阜市、2010年9月28日、矢部 隆 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

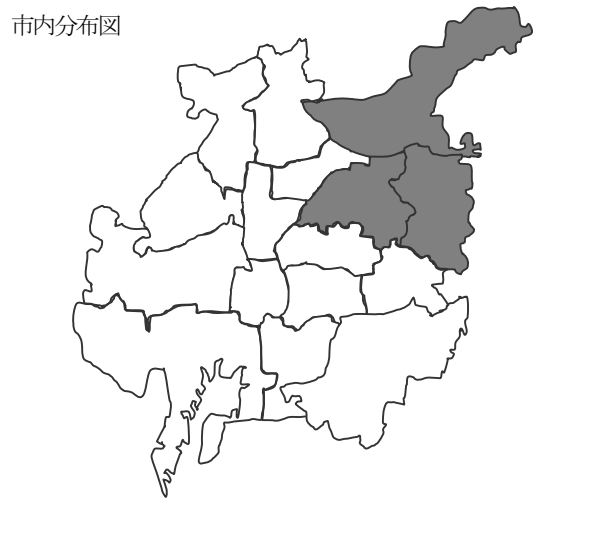
山地から草地、水田や畑まで幅広い環境に生息している。水によく入り、小魚、カエルの幼生(オタマジャクシ)や小型の幼体を専門に食べるが、ミミズもしばしば食べる。昼行性である。5～6月に交尾し、7～8月に4～10個の卵を産む。

【現在の生息状況／減少の要因】

水棲動物をよく補食するヒバカリにとっては、好適な水辺環境が必須である。しかし名古屋市内では、河川や用水、ため池などの岸がコンクリートやブロックでおおわれて移動が困難になったり水生植物群落が喪失したりして、水辺エコトーンが悪化しており、ヒバカリの個体数の減少の第1の原因となっている。また近年市内では両生類が急速に減少しており、食物が減少していることもヒバカリの減少の要因の一つである。

【保全上の留意点】

昼行性で様々なハビタットに生息する種ではあるが、シマヘビやヤマカガシよりもかなり小型なので、やや観察しにくい面がある。今後注意深く種の分布生息を確認し、市内でこの種がおかれている実態を十分に把握しなければならない。



(執筆者 矢部 隆)

ヤマカガシ *Rhabdophis tigrinus tigrinus* (Boie, 1826)

評価区分

名古屋市2020	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2020	情報不足
環境省2020	リスト外

【選定理由】

アズマヒキガエルやナゴヤダルマガエルなど、専門的に補食するカエル類の激減、およびヤマカガシの重要な生息場所である水辺や山地の植生の荒廃が、ヤマカガシに深刻な影響を与えている。

【形態】

全長 70～140cm。体の色や模様には変異が大きい。ふつうは、背面の地色は緑が濁った褐色か暗褐色で、黒斑が並び、黄色や赤色はその斑紋の間に混じる。幼体では後頭部に、口角の後ろから背面に回る黄色い横帯がある。2種の毒腺を持っている。一つは頸腺で、頸部の背面の皮膚の下に2列に並ぶ毒腺であり、強くつかまれたり噛まれたりすると、毒が染み出したり場合によっては飛散したりして、天敵を痛い目に合わせる。もう一つの毒腺はデュベルノイ腺で、ここから分泌される毒は上顎の奥の毒牙を伝わって、獲物や天敵に注入される。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区（2009年）、名東区（2009年）、千種区（2009年）で確認されている。

【県内の分布】

県内に広く分布する。

【国内の分布／世界の分布】

本州、四国、九州に自然分布する日本固有種。なお、日本のヤマカガシは、これまで中国のタイリクヤマカガシや台湾のタイワンヤマカガシと同種別亜種とされていたが、2012年に独立した種とされた。

【生息地の環境／生態的特性】

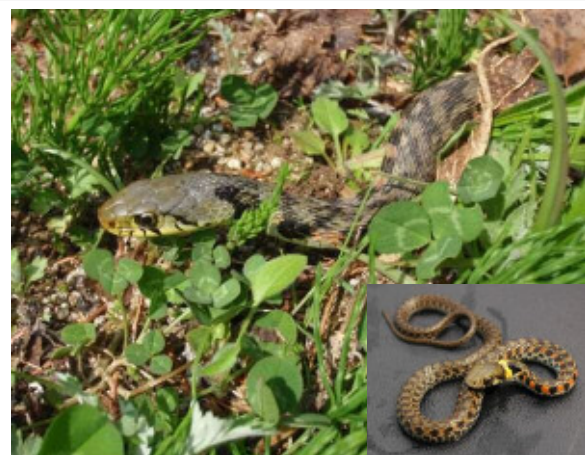
昼行性である。主食はカエルであり、水に入ってからカエルの幼生（オタマジャクシ）や魚も食べる。そのため、平地や丘陵地の水田や小川、湿地に好んで生息する。耳腺に毒があるので他のヘビは食べないヒキガエルも食べることができる。大型のカエルであるヒキガエルを捕食できる生息地に棲むヤマカガシは、大きく成長するようである。秋に交尾し、翌年の6月～8月に2～30個の卵を産む。大きなメスほど多産で、40個以上産卵することもある。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年名古屋市では両生類が急速に減少しており、ヤマカガシにとって主食がいなくなっていることが、このヘビの激減の第1の原因であろう。名古屋市内では、河川や用水、ため池などの岸がコンクリートやブロックでおおわれて移動が困難になったり水生植物群落が喪失したりして、水辺エコトーンが環境が悪化しており、最適なハビタットが失われていることも、ヤマカガシの個体数の減少の主要な原因である。

【保全上の留意点】

かつてヤマカガシは、シマヘビやアオダイショウと共に平地で最もよく見られるヘビであった。そのような普通種が近年急になくなった事態を重く受け止め、ヤマカガシの生息の実態調査と保全に力を注ぐべきである。

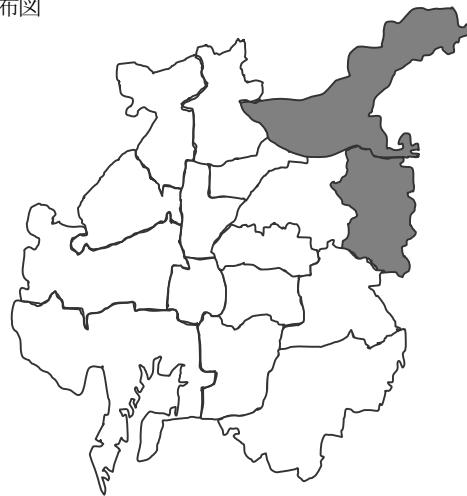


ヤマカガシ（左：成体、右下：幼体）

左：豊田市藤岡町、2009年4月19日、矢部 隆 撮影

右下：2006年6月3日、矢部 隆 撮影

市内分布図



（執筆者 矢部 隆）

ニホンマムシ *Gloydius blomhoffii* (Boie, 1826)

評価区分

名古屋市2020	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2020	リスト外
環境省2020	リスト外

【選定理由】

2012年に初めて名古屋市内で確認されたばかりで、市内での生息の実態が分かっていない。ニホンマムシにとって好適な生息地が市内ではそれほど見当たらず、個体数が多いとは考えられない。2015年の名古屋市版レッドリストでは情報不足 (DD) と評価したが、その後の確認数が少ないことから名古屋市内の個体数が少ないと判断し、ランクを絶滅危惧Ⅱ類 (VU) に変更した。

【形態】

全長 40~65cm くらいで比較的短い。胴は太めである。背面の色には変異が多いが、ふつうは地色が灰褐色あるいは暗褐色で、黒い縁取りのある黒褐色の大きな斑紋がある。この斑紋は、前後に少しずつずれた対になって背面の左右に、約 20 対並んでいる。斑紋の左右の対が背面中央で融合していることも、ふつうにある。上顎前部に 1 対の長大な毒牙を持つ。目と鼻孔の間には 1 対のピット器官があり、赤外線の像を見ることができる。瞳孔は縦に細長い楕円形である。アオダイショウの幼蛇は背面の地色が淡褐色で、褐色のはしご状の横斑が並び、模様が似ているので、マムシと誤認されることがあるが、よく観察すれば斑紋のパターンは異なっているし、アオダイショウの瞳孔は円いので、区別することができる。幼蛇では、尾の先の方が目立つ黄色あるいは淡い橙色である。



ニホンマムシ
岡崎市, 2007年8月29日, 矢部 隆 撮影

【分布の概要】

【市内の分布】

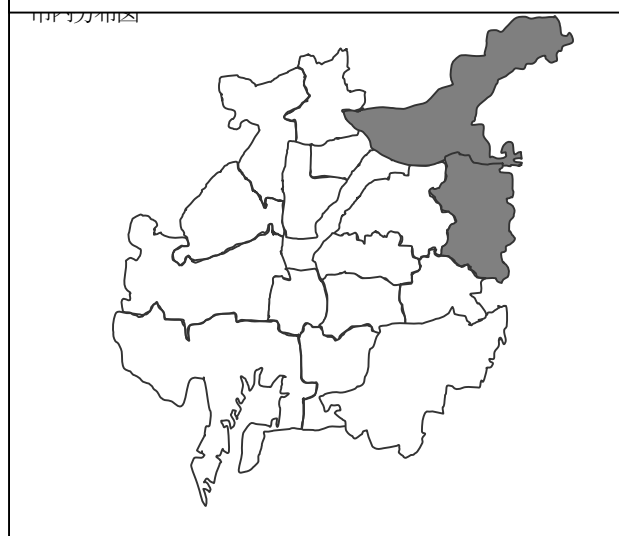
守山区の 2 ヲ所および名東区で確認されている。

【県内の分布】

丘陵地や台地、山地の森や林に分布している。

【国内の分布／世界の分布】

北海道、本州、四国、九州に自然分布する日本列島の固有種。なお同属別種のツシママムシが、長崎県対馬にこの諸島の固有種として分布している。



【生息地の環境／生態的特性】

森林やその周辺の田畑に多く、きれいな水のあるところを好む。基本的に夜行性であるが、冬眠前後には日光浴のため昼間に出現することがある。背中模様は林床の落ち葉の上や木漏れ日の下では見事な保護色になっている。カエルやネズミを中心として、トカゲやヘビといった爬虫類から鳥類、魚類まで小型脊椎動物を幅広く捕食する。またムカデなどの節足動物を食べることもある。8月下旬~9月に交尾し、卵胎生であるので翌年の8月~10月に5~6頭の幼蛇を産む。有毒である。

【現在の生息状況／減少の要因】

2012年に初めて名古屋市内で確認されたばかりで、市内での生息の実態は分かっていない。ただし、ニホンマムシにとって好適な生息地が市内ではそれほど見当たらず、個体数も多いとは考えられない。カエルが市内で減少していることも、ニホンマムシの生息を困難にしている。

【保全上の留意点】

夜行性で、小型なので、観察しにくいヘビである。市内ではまだ1例しか記録されていないので、今後注意深く種の分布様式や生息状況を明らかにし、市内でこの種がおかれている実態を十分に把握しなければならない。

(執筆者 矢部 隆)

シマヘビ *Elaphe quadrivirgata* (Boie, 1826)

評価区分

【選定理由】

名古屋市内において、シマヘビの主たる生息場所である林や森の林床の環境が急速に悪化し、それにともなって個体数が激減している。

名古屋市2020	準絶滅危惧
愛知県2020	リスト外
環境省2020	リスト外

【形態】

全長は80～150cm。体の背面は黄褐色または褐色で、胴背に4本、尾背に2本の黒褐色の縦条がある。瞳孔は縦長の楕円形で、虹彩は赤い。特定の頻度で、カラスヘビと呼ばれる全身が真っ黒の個体が現れるが、黒色個体では虹彩も黒色である。幼蛇は成蛇とはまったく異なった色や模様である。背面の地色は赤みがかった淡褐色で、褐色の横縞が並ぶ。瞳孔が縦長の楕円形で、虹彩が赤いのは成蛇と同様である。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区（2009年）、名東区（2009年）、千種区（2009年）、中区（2009年）および天白区で確認されている。

【県内の分布】

県内に広く分布する。

【国内の分布／世界の分布】

北海道、本州、四国、九州に自然分布する日本固有種。



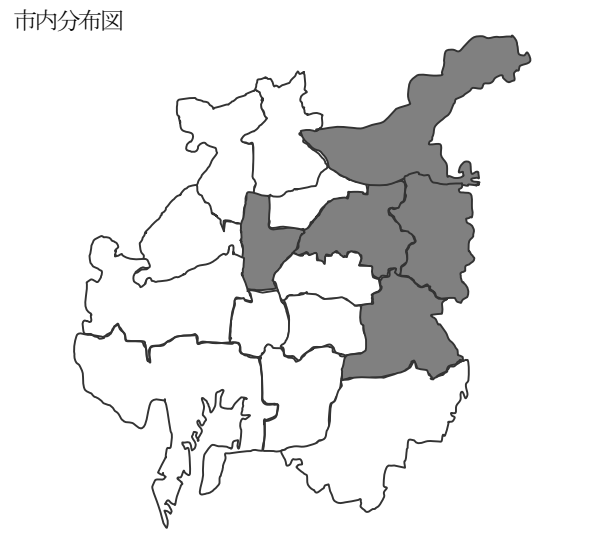
シマヘビ（上：成体、左下：黒化型、右下：幼体）
上：岡崎市、2008年5月17日、矢部 隆 撮影
左下：豊田市藤岡町、2008年5月15日、矢部 隆 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

昼行性である。平地から山地まで広い範囲で生息するが、ある程度開けた太陽の光が当たる環境を好む。食物の範囲は広く、食虫類やネズミ類などの哺乳類、鳥類の卵や雛、トカゲやヘビ、ヘビの卵、カメの卵といった爬虫類、カエルの成体や卵、サンショウウオといった両生類など、広範囲な脊椎動物を捕食する。ただし、最もよく食べるのはカエルの成体である。4月～6月に交尾し、夏に4～16個の卵を産む。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市内では、河川や用水、ため池などの岸がコンクリートやブロックでおおわれて移動が困難になったり、草が喪失したりして、シマヘビが捕食したりねぐらとしたりするような場所がなくなっている。このような生息地の環境の悪化がシマヘビの減少を引き起こしている。ヤマカガシやヒバカリの場合ほど深刻ではないと思われるが、よく捕食しているカエルの減少も、シマヘビの減少の原因の一つであろう。



【保全上の留意点】

シマヘビは、アオダイショウやヤマカガシと共に里地で最もふつうに見られるヘビであった。そのような普通種が近年急になくなった事態を重く受け止め、市内でのシマヘビの生息の実態調査と保全に力を注ぐべきである。

（執筆者 矢部 隆）

クサガメ *Mauremys reevesii*(Gray, 1831)

評価区分

名古屋市2020	情報不足
愛知県2020	リスト外
環境省2020	リスト外

【選定理由】

市内の池や川で比較的多くの生息地が確認されている。しかしこの種については、愛玩動物として養殖され、県外あるいは国外から移入されたと考えられる場合があり、その場所のクサガメの個体、あるいは個体群の由来がはっきりしない場合が多い。

【形態】

背甲長は、オス 15~20cm、メス 20~25cm。背甲に3本の発達した隆条を持つ。頭部の側面や咽頭部から頸部にかけて、黒く縁取られた黄色の模様が多数ある。若齢の個体では、背甲の甲板は細く黄色に縁取られる。しかし高齢なオスではそれらの模様が消え、全身が完全に黒化する。腋下甲板と鼠蹊甲板のラスケ孔から、独特の香りがする澄んだ橙色の液を分泌する。

【分布の概要】

【市内の分布】

2005年以降の調査では、熱田、北、昭和、千種、天白、中、中村、西、瑞穂、緑、南、名東、守山の各区で確認されている。

【県内の分布】

県内に広く分布し、濃尾平野に多い。ただし北部の山地には分布しない。

【国内の分布】

本州中央部以西、四国、九州に自然分布する。

【世界の分布】

中国東部、朝鮮半島、台湾。

【生息地の環境／生態的特性】

同属のニホンイシガメが丘陵地から山地にかけての領域におもに棲むのに対して、クサガメは低地の止水、あるいは流れの緩やかな、川の下流域から中流域にかけての平地を中心に生息する。秋と春に求愛、交尾する。産卵期は6月下旬から8月上旬で、年2回産卵する個体が多い。1回に10個前後産卵する。池沼や河川の水底で、落ち葉などの堆積物の下に潜んだり、泥に潜ったりして越冬する。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市では、ハビタットの環境の劣悪化、アライグマやウシガエル、アリゲーターガーやカムルチーやコイなどの捕食外来動物による負傷や死亡の増加、生態的地位が似ている外来のミシシippアカミミガメの増加による生活の圧迫により、数が減り続けている個体群が多い。

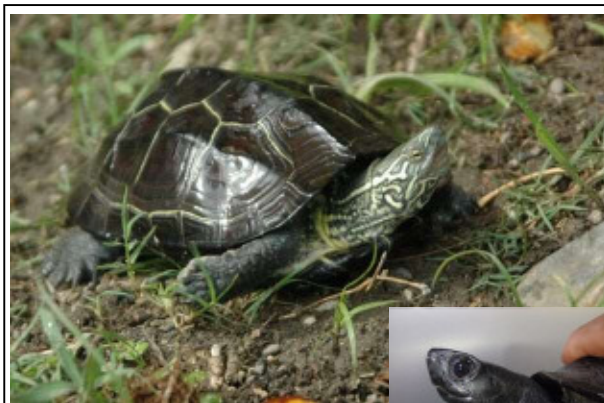
市内のクサガメの個体や個体群においては、市外から持ち込まれた外来のクサガメである可能性がある場合があるので、在来のを保護し、外来のを防除する管理を本来はすべきである。ただし外来か在来かを判別する生物学的法方は確立されておらず、今後詳細な研究を進める必要がある。

【保全上の留意点】

性染色体を持たず、孵卵温度が高いとメス、低いとオスになる。したがって産卵場所の温度環境が好ましくないと、孵化個体の性比が偏り、長期的に見て個体群が維持できなくなる。

貯精、遅延受精の能力があり、在来のニホンイシガメと交尾する機会が極めてわずかであっても、繁殖能力のある子孫が多数生まれ続け、遺伝子汚染が進行する恐れがある。市内のニホンイシガメの自然分布地で、人為的に移入されたクサガメとの交雑が確認された地域からは、クサガメを防除せざるを得ないであろう。

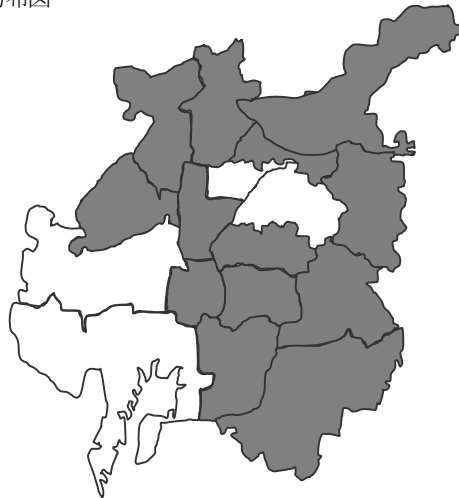
(執筆者 矢部 隆)



クサガメ (右下: 黒化した頭部)

矢部 隆 撮影

市内分布図



ニホンスッポン *Pelodiscus sinensis* (Wiegmann, 1835)

評価区分

名古屋市2020	情報不足
愛知県2020	情報不足
環境省2020	情報不足

【選定理由】

市内の池や川で比較的多くの生息地が確認されている。しかしこの種については、食用もしくは愛玩動物として養殖され、市外、県外あるいは国外から移入されたと考えられる場合があり、その場所のニホンスッポンの個体、あるいは個体群の由来がはっきりしない場合が多い。

【形態】

雌雄とも背甲長 20~25cm、体重 1~2kg であるが、まれに 35cm から 40cm 弱、体重が 7kg を超えることがある。背甲は灰褐色で、甲板がなく、後部には骨版が伸びておらず、手で曲げることができるくらい柔らかい。背甲の表面は柔らかく、短い隆条や粒上の特記がある。前趾後肢とも水かきが発達しており、指は 5 本であるが、爪は 3 本しかない。首は非常に長い。頭部は細長く、突出した吻端に鼻孔がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

2005 年以降の調査では、熱田、北、昭和、千種、太白、中、中村、西、瑞穂、緑、南、守山の各区で確認されている。

【県内の分布】

県内に広く分布する。ただし北部の山地には分布しない。

【国内の分布】

本州中央部以西、四国、九州に自然分布する。

【世界の分布】

中国東部、朝鮮半島、台湾。

【生息地の環境／生態的特性】

低地から丘陵地にかけての池沼、河川では下流域から中流域の流れが比較的緩やかな水系に棲む。臆病で、日中は水底の砂に身を隠して、ときおり長い首を伸ばして吻端の鼻孔を水面に上げ、呼吸をする。人をはじめとする天敵に襲われないことが分かっていたり、人に馴れたりしていれば、岸に上がって日光浴をする。6 月~8 月に、メスの体の大きさに応じ、1 回に 10~40 個の卵を陸地に産む。性染色体によって性が決定される。水底で越冬する。肉食性の強い雑食性で、おもに薄明薄暮に、水底の貝類やエビ類、弱ったり死んだりしている魚類、水生植物などを採餌する。

【現在の生息状況／減少の要因】

上で述べたような生活様式を支えるハビタット、特に幼体成体とも、水生植物の群落や砂質の水底といった身を潜める場所が急速に失われており、個体数の減少に拍車をかけている。

【保全上の留意点】

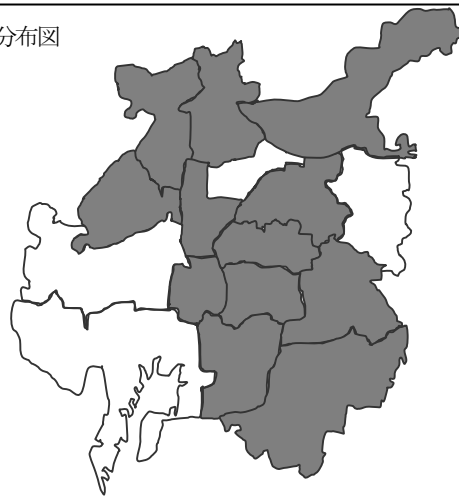
遺跡から出土した遺体などから、ニホンスッポンは本州、四国、九州の在来種であることは分かっている。愛玩動物や食用で移入された移入個体と区別して在来のニホンスッポンを保全するようにすべきである。ただし、この種の種内変異、個体群間変異についての形態学的あるいは分子生物学的手法はまだ確立されていない。



ニホンスッポン

矢部 隆 撮影

市内分布図



(執筆者 矢部 隆)

タカチホヘビ *Achalinus spinalis* Peters, 1869

評価区分

【評価理由】

これまで名古屋市内では2008年に1度確認されただけにすぎず、市内の個体数が極めて少ないことは予測できるが、生息の実態は全くわからないので、情報不足DDと判定した。

名古屋市2020	情報不足
愛知県2020	情報不足
環境省2020	リスト外

【形態】

全長30～60cmの小型のヘビである。背面の地色は褐色、黄褐色、あるいは灰褐色で変異があり、黒い背正中線がある。光にかざすと真珠光沢が見られる。他のヘビとは異なり、背中の鱗が重なっておらず、鱗と鱗の間に隙間があり、乾燥に弱い。上顎が下顎に覆い被さっており、地中を這い回る時に口に土が入らないようになっていると思われる。多くのヘビでは、尾の腹面の尾下板、つまり総排出腔よりも後ろの鱗板は2列に並んでいるが、タカチホヘビでは1列で、腹部と同じ蛇腹構造になっている。



タカチホヘビ
豊田市、2013年8月10日、矢部 隆 撮影

【分布の概要】

【市内の分布】

2008年に守山区の広葉樹林で1例確認されているのみで、市内での分布状況は不明。

【県内の分布】

愛知県版レッドリストによれば、県内では東三河の山間部から西三河北部を経て尾張部の北側の丘陵地や山地にかけて発見場所が点在している。また知多半島の先端部でも確認例がある。詳細な分布域はよくわかっていない。

【国内の分布】

本州、四国、九州とその周辺の島嶼部に分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島には分布しておらず、大陸中国に広く分布しているとされている。しかし日本産のタカチホヘビと中国産のものは別種である可能性が高い。

【生息地の環境／生態的特性】

夜行性で地中性なので、人の目に触れる機会が少なく、生態はよくわかっていない。林床の湿った落ち葉の堆積や朽ちかけた倒木、あるいは石の下にすることが多い。ミミズなど土壌動物を捕食している。広葉樹あるいは広葉樹と針葉樹の混合林で見つかることが多い。針葉樹林の落葉層は富栄養ではないので、あまり生息していないようである。

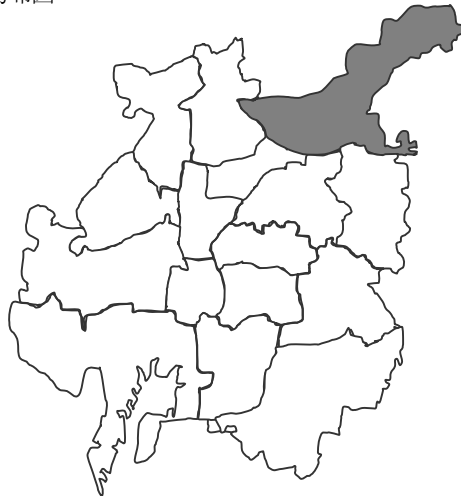
【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市内での確認例が1例しかなく、生息状況はよくわかっていない。

【保全上の留意点】

市内での生息数が少ないことは予測できる。しかしまず市内での分布や生息状況、食性などの生態を明らかにすべきである。

市内分布図



(矢部 隆)